「技術の伝承は人を育てるところから」

宮大工　森下孝明さん

大田市祖式町・63歳
㈲森下コンストラクター代表取締役

50年の永きにわたり、全国各地の社寺建築に携わり、また、後進の指導育成にも努めてこられた森下さん。その実績が評価され、この度、卓越した技能者表彰「現代の名工」を受章されました。建築技術の習得や伝承への思いを伺いました。

弟子入りして体で覚えた

父親を早くに亡くし、手に職をつけようと、祖式町の石原建築に弟子に入ったのが15歳の時。おやじ（＝父親でなく宮大工の師匠のこと）は、遠くは住吉大社から近くは出雲大社まで、棟梁として年中ずっとまわっていたそうだ。私が弟子入りしたのは、おやじが晩年、地元にいるようになってからのこと。

その頃は、山で木を伐ったり出したりするところから、製材までやっていた。おやじが製材機を使うときには相棒がいるから、私はずっとその相手。木の見方、どう切り分けるのか、どう曲がるのかというのは、ついて見ていたから、それで覚えさせてもらった。

それから、土壁のための竹も伐った。竹を割って、小舞をかく。それから土を掘って、練って、藁を入れて、水を調整して。土を練った時の、丁度良い硬さは、今でも足が覚えている。体で覚えたら忘れない。

叱られることもたくさんあったからね、下積みする間に、人間的にも成長できた。若い時にそういう苦労をしておけば、少々のことも耐えられる。叱られることも当たり前だと思っていた。

写真上左／作業場での指導。女性の入門にはドラマがあったとか…。

棟梁に、そして独立…

22歳で棟梁を任された、責任は重大。寝ても覚めても、現場のことが頭から離れなかった。一番若い私が、年季のいった大工を何人も使わなければならなかった。そういう難しさというのは骨身にしみている。

その後、独立させてもらった。現在、私の会社には、34歳までの7人の大工がいる。毎朝、朝礼をしているが、現場できちっと言わないと理解できないこともある。しっかり教え込みたいという気持ちがある。初めは手間もかかるから、弟子がとれるのは3年に一人くらいだ。

昔は見て覚えろ、だったかもしれないが、今はそういうわけにはいかない。ある程度できるようになれば見て覚えることもできるが、最初からできるわけはない。本当に危ない時は大きい声も出す。

私も口ではえらそうに言うけども、全部が全部うまくいくわけではない。自分が悪い時もあるからね。それをフォローしてくれるのが女房。女房役がおらないけんな、人を育てるには。

ＮＨＫの番組で、カンナがけを披露。照明の熱で苦労されたとか。

家づくりで大切なこと

できるだけ、昔ながらの在来工法を取り入れるようにしている。木と金物は相性が良くないからあまり使いたくないが、新しい金物でも、これはいいと思えば使う。建築中の石州素舞流のモデルハウスがその見本。

よその現場で、新建材の壁材を見ることもあるけれど、何年か経った後の風合いを考えると、昔ながらのものの方がいいなと思う。

新しいものは、その時は安いが、後で維持費がかかることが多い。

同じ金額でやれといわれれば、家の骨組みに力を入れる。その分、設備類などは下げるよ、流行もあるしね。一生使っていくものではないし、必要以上のものは要らない。

適材適所、木も人も同じ

一軒の家を建てるには、木のくせを分かって、適材適所に配置してやる。それには、木のくせを見抜く力を持たなくてはいけない。そのためには、数をたくさんあたって、いろんな木を見たりやったり。絶えず言っているが、木も人と一緒、生き物だと。

木がこうして使ってもらいたいと思っているのに反対に使うと、怒る。いやなのに無理やりさせると、反発する。楽なように押してやったり、壁で支えてやるとか。そうしてやると、木も楽だし、それできちっと狂いもせん。ただそれだけのこと。

人も同じ。素直な子はどこでも使える、家づくりでも一緒、どの場所へでも使える。一方、くせのある子は、強い。強いから、もっていきようによっては、一番力のかかる場所で、うまくサポートしてやれば、大きな力を発揮する。

技術の伝承のために

技術を伝承させようと思ったら人を育てるところからやらなければならない。どんなに上達が早くても、心がついていかなければそこで止まってしまう。その人がどんな技術を持っていても、次の人に伝えられる人でなければ、そこで途絶えてしまう。そうでしょ。だから、人を育てるということがとても大切なんです。

「ものづくり名人」としても、子供たちに木工の楽しさを伝えておられます。

伝統と素材
せきしゅうすまいる
石州素舞流の家

島根県大田市の職人達が、地元の自然素材を使った住まい造りのお手伝いをします。

ニュース・イベント｜サイトマップ｜リンク｜お問合せ

HOME　コンセプト　プラン　リフォーム　メンバー

石州 SEKISYU SMILE 素舞流

◆「モデルハウス」竹子舞土壁　Ｐａｒｔ１◆

今年度は、国土交通省の補助金を受け、長久町稲用にモデルハウスを建築しております。
今回の壁材は、竹子舞土壁にしております。
竹子舞土壁の材料は全て大田市内で調達できるものばかりです。

竹子舞土壁の利点を左官さんに教えていただきました。
・耐火性（土は燃えない）
・耐震性（パネル状になり、筋交い効果有り）
・耐熱（保温）性、遮音性
（土壁が厚く、熱が伝わりにくい）
・調湿性（吸湿・放湿を土が自然に行う。）
・エコ（解体時には再利用できる）
・健康（化学合成物質が含まれていない。）

初めて竹子舞を見ましたが、壁の性能として求められていることが全て対応できるおり、「昔の人はよく考えて作っておられたんだなー」と関心しました〈(__)〉

場所　大田市長久町字稲用659-1

お問合せ
<石見の匠・住まい造り集団>
石州素舞流（せきしゅうすまいる）
〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ309-2（大田商工会議所内→ＭＡＰ）
TEL：0854-82-0765／FAX：0854-82-2993
e-mail:ohdacci@shimanet.jp

↑石州素舞流ＨＰ

Copyright(c)Sekishu Smile, All rights reserved.

‘石州素舞流’ モデルハウスを建築中！

地元の材料と伝統の技術での家づくりをすすめるグループ‘石州素舞流’の取り組みも、７年目になりました。メンバーは、工務店、製材所、瓦メーカーなど、地元の住宅関連事業者です。彼岸市での木工体験や植樹体験などを行う中で、その活動も認知されてきています。

さて、石州素舞流では、森下さんの陣頭指揮のもと、現在、長久町においてモデル住宅を建築中です。２月には完成し、住宅展示会を行います。

施工にあたっては、自然素材と伝統の技術はもちろん、最新の技術も取り入れています。また、天井は表わしとし、土壁も施工の様子が分かるようにするなど、‘魅せる’工夫も随所に見られます。お楽しみに。

【問い合わせ先】石州素舞流事務局（大田商工会議所）☎0854-82-0765